

季刊 湘南自然誌

2020年 春の記録号 通巻17号

Vol.17

Shonan Nature Magazine
2020 Spring Report

Contents

P1 ~ 四季のコラム

P3 ~ 特集1「外来種ってなに?なぜ問題なの?」

P5 ~ 特集2「生態系に悪影響を及ぼす外来種」

P9 ~ みんなでつくる生きもの図鑑

P19 ~ 平岡幼稚園 ActionReport

P21 ~ 教育コラム・知育ゲーム

P22 おえかきひろば

P23 NEWS・知育ゲームの答え



「ナミアゲハのようちゅうみつけたよ」
田川楓（4才）

特集1

外来種ってなに?
なぜ問題なの?



日本生態学会会員
岸一弘先生

特集2

湘南版
生態系に悪影響を
及ぼす外来種
岸一弘監修



自然はみんなのワンダーランド！

四季のコラム

2020 春

園児と共に自然に触れ合う中から生まれた自然にまつわるコラムです

ほった よしのすけ
堀田 佳之介



平岡幼稚園 園長
1級こども環境管理士
2級ビオトープ施工・計画管理士
神奈川昆虫談話会会員
ひらつか生物多様性推進協議会幹事

身近な環境にも日々さまざまな発見が！

4月7日に緊急事態宣言が発出されて以降、長らく外出自粛が求められてきました。神奈川県は5月25日に解除されましたが、当面の外出は、ソーシャルディスタンスをとるために公園や野山、海川など自然とふれあえる場所を選択される方が多いと思います。そこで、今回は身近な自然のタイムリーな話題をいくつかお届けします。

絶滅とされていた生物発見！？ 平塚海岸の小さな虫たち



砂浜の漂着物は、多くの海浜性生物が利用しています。海岸を散歩した際に、漂着物を引っ繰り返して虫探しをしたところ、いくつか小さな虫が見つかりました。持ち帰った虫を神奈川昆虫談話会の高橋和弘先生に見ていただいたところ、なんと、県内では（一時）絶滅したとされていた2種が含まれていることがわかりました。

海岸の虫は、調べている人が少ないので、長年見つからなかったものと思われますが、それでも少し調べただけで、このような発見が得られたのは驚きです。詳しい内容は、神奈川昆虫談話会の神奈川虫報 第202号に報告を投稿中ですので、後日改めてご紹介します。

※海岸の微小な虫たちは、見分けが難しいものも多いので、詳しく調べるには標本にして専門家の先生に見てもらう必要があります。



多くの写真が寄せられた本誌 P9～18 の 「みんなで作る生きもの図鑑」

自粛が続いた今シーズンですが「みんなで作る生きもの図鑑」にはたくさんの写真を掲載することができました。昆虫、鳥、魚、植物、など全部で228枚、123種（種名不明を除く）にのぼります。その中には、ドキドキしながら恐るおそる触った子の写真もあるでしょう、宝物のように虫かごに入れて大切にしていた子の写真もあるでしょう。これら1枚1枚の生物写真の裏側には、発見者や撮影者の「喜び」「驚き」「感動」など心躍る体験がたくさん詰まっています。

生きもの図鑑に集まったみなさんの発見の数々、ぜひご覧ください。



2020年も大発生！？ キアシドクガ



成虫

平塚市めぐみが丘(2020年)



平塚市めぐみが丘(2019年)

蛹



幼虫

平塚市北金目(2020年)

2018年以降、湘南地域で大発生が続いているキアシドクガ。今号の図鑑コーナー（P14）にも2枚の写真が投稿されましたが、今年も多くの個体が発生した模様です（私も平塚市内でたくさんの幼虫・蛹を見ました）。翅（はね）を立てて飛ぶことから、チョウと見間違えられることもある本種ですが、実はドクガの仲間です（幼虫・成虫ともに無毒とされています）。寿命はおおよそ1年で、そのほとんどが卵の期間です。5月下旬頃に産卵された卵は、そのまま越冬して春に孵化します。5月中旬ごろには成虫になりますが、成虫は口吻（こうぶん：くち）が退化して食べることができないため、数日しか生きられません。そのため短期間で交尾・産卵を行います。

大発生すると、食草であるミズキやクマノミズキを弱らせたり、枯らしてしまうこともあるようですが、大発生は一時的（5年程度でおさまる）という報告もあります。さて来年はどうなるのでしょうか？

平塚市未記録種だったかも！？ 大根川のカワトンボ属



大根川横で見つかったカワトンボ属

羽化間もない♂(4月上旬)

♀(4月下旬)

水の綺麗な清流や細流に住むカワトンボ属は、神奈川県にはニホンカワトンボとアサヒナカワトンボの2種（伊豆個体群※も含む）が分布しています。

平塚市真田の大根川横の住宅地で、卒園児が4月上旬に羽化間もないオスの個体を見つけて園に持って来てくれました（左上写真）。平塚市は大磯丘陵にニホンカワトンボが分布していますので、その時はニホンカワトンボと思ってしまったのですが、大根川の水源は丹沢山地南端の権現山付近なので、平塚市未記録のアサヒナカワトンボ（伊豆個体群）だったかもしれません。

その後も、4月下旬にメス1個体（左下写真）、5月上旬に1個体（雌雄不明）が同じ住宅地内で目撃されていますが、同定には至りませんでした。上流から流下した幼虫が羽化したものと思われますが、来春も見られる可能性がありますので、大根川のカワトンボ属、ぜひ探してみてください。（カワトンボ属の正確な同定はDNAの検証が必要なので、もし見つけたら採集して幼稚園までお持ちください）。

湘南地域への侵入が危惧される ムネアカオオクロテントウ（外来種） WANTED !



ムネアカオオクロテントウ

写真提供：
大阪市立自然史博物館 初宿成彦学芸員



クズ(葛)は河原や空き地
などあちこちで見られます

ムネアカオオクロテントウは、台湾、中国南部、東南アジア原産の外来種です。本種はクズ（葛）の汁を吸うマルカメムシを食べてしまうため、クズがより旺盛に繁茂し、生態系への悪影響が懸念されます。

神奈川県では2015年ごろより、川崎市・横浜市を中心に増えてきました。2019年には厚木市、2020年には大和市、海老名市でも確認されているようなので、湘南地域で確認されるのも時間の問題と思われます。

本種を見つけたら、写真を撮影していただくか、捕獲して園までお持ちいただけると嬉しいです。大きさは6～7mmで丸みがあります（ナナホシテントウよりやや小さいくらい）。もし本種が侵入しているとすれば、クズが生えているあたりで見つかると思います。（写真を提供して下さった初宿成彦学芸員に感謝申し上げます。）

※ニホンカワトンボ・アサヒナカワトンボの交雑によって生まれた雑種個体群と考えられている「伊豆個体群」の位置付けについては、今後の検討課題となっています

外来種ってなに？ なぜ問題なの？

日本生態学会会員

きし かずひろ

岸一弘
先生

「綺麗な花だから道端にも植えていこう」「可哀想だから公園に逃がしてあげよう」。このような生きものの善意の拡散が、実は地域の自然を壊してしまうことがあります。また、流通に紛れるなどして、意図せず移入されてしまう問題も多数起きています。そのようなことを少しでも減らすためにも、この特集をきっかけに外来種問題への理解を深めてもらえたらと思います。(編集部)

インタビュー：堀田佳之介（平岡幼稚園園長）

1級こども環境管理士、2級ビオトープ施工・計画管理士、神奈川昆虫談話会会員

外来種とは？

堀田佳之介（以下、堀田）＞今日は、動植物全般にお詳しく、神奈川県ブルーリスト（要対策外来種リスト）作成にも携わってらっしゃる岸先生に、外来種について伺いたいと思います。まず、外来種の定義から教えていただけますか？

岸一弘（以下、岸）＞外来種とは、元々その地域にいなかった生きもので、その地域に定着してしまった種類のことです。

堀田＞外国から入って来たものだけを外来種と呼ぶと誤解されがちですが、国内・国外に関わらないのです。

岸＞そうです。国内の生きものでも、そこに元々いなかったものは外来種となります。そういう生きものは「国内外来種」と呼ばれます。それから、他所から入ってきたけど定着できなかったものは外来種とは言いません。キャベツなんかはその辺に植えてもやがて消えてしまいますよね。そういうものは栽培種とは言えるけれども外来種とは言いません。もうひとつ重要な条件は、人間の活動が関わっているかどうか？ということです。人が意図的に移動させたものや、意図してなくても物資に紛れて入ってしまったものが外来種になります。自分の力や台風などの気象現象によって移動してきたものは外来種とは言いません。

堀田＞同じ湘南地域だからといって、人の手で平塚の生きものを大磯へ移動させてしまうと、そこでは外来種になってしまうということですね。

岸＞どこからどこまでを同一地域と考えるかは生きものの種類によって違いますが、その生きものが本来持っている移動能力を越えた移動を人為的に行ってしまう、そこに定着してしまったら、それは外来種になってしまいます。

堀田＞どの生きものがどの程度の範囲で生活しているのかは、専門家でないとなかなか分かりません。

岸＞そうですね。例えば、ジャコウアゲハは食草となるウマノズクサ周辺にしかいないように見えますが、実は食草を探しながら結構移動しています。逆に、移動能力が高いはずなのにその場所からあまり移動しないものもあります。

岸一弘先生 Profile

1958年茅ヶ崎市生まれ。東京農工大学農学部卒。農林省植物防疫所を経て茅ヶ崎市の職員へ。1990年から11年間、茅ヶ崎市文化資料館で自然観察会や生物調査を主導。2001年には「野外まるごと博物館」をテーマとした茅ヶ崎野外自然史博物館を立ち上げ、顧問を務める。積極的に神奈川県下の生物調査に取り組み、県レッドデータブック（絶滅危惧種を指定した本）や県ブルーリスト（要対策外来種のリスト）などの作成にも携わる。その見識は昆虫類に留まらず、動植物全般に渡る。

日本生態学会・日本トンボ学会・日本鱗翅学会会員。

著作に『虫たちはどこへいくのか』『いろいろたまご図鑑（共著）』（ポプラ社）、『イモムシ・ケムシぞろぞろ大図鑑（共著）』（PHP）などがある。

例えば、クロヒカゲというチョウは地層が古いところにしかいません。下末吉海進期（約12万5000年前）より後にできた陸地にはいないんです。新しい陸地でも餌があれば移動しそうですが、実際には移動していないんですよ。なので、移動させても問題ないとかあるとか人間が勝手に決めてしまうと、予期せぬ外来種問題を引き起こしてしまい、生態系を攪乱してしまう可能性があります。ある環境が消失してしまうので緊急避難的に生きものを移動させざるを得ない場合を除けば、人の手で移動させるのはやめるべきです。

堀田＞今、「外来種問題」とおっしゃれましたが、どうして外来種が問題なのか少し詳しく教えていただけますか？

外来種の何が問題なのか？

岸＞アメリカザリガニやウシガエルを思い浮かべると分かりやすいと思います。これらの外来種が侵入してしまうと、元々いた生きものを食べつくしてしまいます。また、圧倒的な繁殖力も持つこともあって、その地域の生物多様性を著しく下げてしまうのです。

堀田＞簡単に言うと、外来種が入ってくると、その地域の自然が貧しくなってしまうということですね。

岸＞そうですね。ただ外来種には、環境への悪影響が多少あるけれども取り除くコストなどを考えるとそれくらいはまあ仕方ないか、というものもあれば、オオイヌノフグリなどのように、どのような影響を与えているのかよく分



撮影：平塚市北豊田

生態系への悪影響が極めて大きい
アメリカザリガニ



撮影：平塚市土屋

外来生物法で栽培が禁止されているにもかかわらず、花壇や道端など各所で
見られるオオキンケイギク



撮影：平塚市万田（湘南平）

機械で根際から草刈りしている悪い管理例。
外来種として問題の多いヒメヒオオギズイセンだけ
刈り残されてしまっている…

かっておらず、在来種と共存しているように見えるものも多いんです。なので、外来種を生態系への悪影響の大きさでランク分けして、ランクの高いものから駆除などの対策を重点的に行っていくというのが今の傾向です。植物であれば、一面そればかりになって在来の植物の居場所を奪ってしまうような、侵略性の高いものから対策を打っていくということです。

堀田> 他の生きものを押しのけてしまうかどうか?で判断するわけですね。平岡幼稚園では、積極的に抜き取り駆除をしているのは繁殖力の強いセイタカアワダチソウくらいですかね。ウラボシチコグサも気付いたら抜くようにしています。他はまあ仕方がないかという感じです。あと、ツルニチニチソウにも困っています。

岸> ツルニチニチソウが繁茂すると、下に光が届かなくなってしまって植生が単調になってしまいますね。

堀田> オオキンケイギクなども花が綺麗なもので、植えてしまう人がいるようですね。善意でやっていることが、結果的に自然を破壊してしまっている。昆虫でも、いなくなってしまったホタルを復活させようとして、よそから導入しようとする例がありますけど…

環境を再生して生きものを待つ

岸> ホタルがいなくなってしまって残念だという気持ちは分かるんですよ。でも、いなくなってしまったということは、ホタルが生息するための条件がなくなっちゃったということなので、やっても無駄なんです。そのうちまた絶滅してしまうでしょう。定着したらしたで問題で、西日本産のホタルが入ってしまって、今いるホタルが在来なのかどうか訳が分からなくなってしまっている場所もあります。それなのに天然記念物になっていたり（笑）。完全な飼育環境で鑑賞するならまだしも、野外に放つのはやっばダメです。「ホタルが綺麗だから」なんていうのは人間の都合です。その環境には他にもいろいろな生きものが生息している。他所の生きものを導入した結果、将来そこへどんな影響が出てしまうかは予想できない。爆発的に増え出したらもう人間にはコントロールできません。安易にそういうことはすべきではないですね。人間がやるべきなのは、直接生きものを移動させるのではなく、地域の環境を再生してあげることだと思います。その上で、生きものが自然と戻って来ることに期待するべきです。

堀田> 平岡幼稚園では、園地の環境を多様化したことでさまざまな生きものがやってくるようになりましたが、ホタルのようなインパクトのある生きものが来ないこともあって、ただ草をボーボーに生やしているだけと誤解されてしまうことも多いんです。生きものの多様性を保つために、あえて草地を残す区画を作ったり、刈るにしても10cm〜15cmくらいの高さで刈るようにしているのですが…

岸> そのような生きものに配慮した土地の管理方法を、「生態系管理」というのですが、もっと広く認知されるべきですね。川の土手や公園で行われているような、機械を使って根際まで草を刈ってしまうような管理をすると、刈れば刈るほど繁殖力の強い外来種ばかりが残る、という悪循環になりますね。

生物多様性の視点で自然をとらえよう

堀田> 最近観光スポットとして、広大な区画をネモフィラ一色に染めてしまうような公園を作るのが流行ってたりしますよね?一面お花畑みたいな環境は自然とは言えないと思うのですが。

岸> そうです。一角だけならまだしも、全部それだけにしてしまう。ネモフィラが綺麗なのは分かるけれども、そういった「人間にとって大事なものを」基準にすると、他の植物が生きていく場所を奪ってしまうようなことが起きてしまいます。そうではなく、「生物の多様性」を基準にすれば、やるべきこと、やってはいけないことは自然と見えてくるはずですよ。そこは教育に期待したいところです。環境省だけでなく文科省にも取り組んでほしい。授業の中で、綺麗な生きものだけが大切なわけではなく、生物の多様性が大事なんだと教える時間を作ってほしい。さらには、生きものと生きものの関係、環境との繋がりが見えてくるような自然体験を増やしてほしいですね。動物園や水族館、植物園といった作られた環境には、自然環境を学ぶという点での価値は少ないと思います。

堀田> 生きものは自然に生息している場所へ行ってみるのが一番ですね。今日は貴重なお話をありがとうございました。

次のページでは、特集2として、湘南地域で見られる問題の多い外来種をリストアップしました。ぜひご覧ください。



湘南地域で見られる外来種の中から、主だったものを紹介します（これから侵入しそうなものも含む）。

動植物の移動は生態系へ悪影響を及ぼすことがあります。「持って帰るなら最後まで飼う（買ったものは最後まで飼う）、逃がすなら元の場所へ」を心がけ、新たな外来種を作らないようにしましょう。

特：外来生物法で輸入・販売・飼育・栽培・保管・運搬が禁止されている特定外来生物
緊：緊急対策外来種
重：重点対策外来種
総：その他の総合対策外来種
（A）（B）：神奈川県版要注意外来種リスト（通称：神奈川県ブルーリスト）のランク
（侵）：日本の侵略的外来種ワースト 100（日本生態学会選定）

アメリカザリガニ

一 緊 (A) 侵

アメリカ南部原産。ウシガエルの餌として移入され、各地で大きな被害が出ている。

生態系にどのような影響を与えることになるのか分からないのに持ち込んでしまうと、悪影響が出てもう人の手でコントロールできなくなることを、アメリカザリガニが証明している。

撮影地：平塚市寺田縄



ウシガエル

特 重 (B) 侵

撮影地：横浜市戸塚区



写真：岸一弘

撮影地：茅ヶ崎市芹沢



北アメリカ原産。食用として移入された。圧倒的な繁殖力であつという間に増え、口に入る大きさのものなら、魚や昆虫、鳥類まで何でも食べてしまう。日本のみならず、「世界の侵略的外来種ワースト 100」である。

ミシシッピアカミミガメ

一 緊 (B) 侵

写真提供：齋藤和久氏



アメリカ南部周辺原産。俗にいうミドリガメ。ペットとして輸入されたものが捨てられ、各地で増殖した。雑食性でさまざまな動植物が影響を受ける。

撮影地：平塚市大原



カミツキガメ

特 緊 (A) 侵

アメリカ大陸に分布。ペットとして輸入されたものが捨てられたと思われる。湘南では藤沢市での発見例がある。噛む力が強く、人への被害がある他、何でも食べてしまうため、環境への影響も大きい。



写真：環境省（外来種写真集）※

アライグマ

特 緊 (A) 侵

北米～中米原産。ペットとして輸入されたものが野生化してしまった。夜行性なのであまり目にすることはないが、すでに広く定着している。

他の動植物への悪影響だけでなく、農業被害も大きい。

撮影地：平塚市上古沢



ノネコ（野生化した猫）

一 緊 (B) 侵

人への被害はあまりないかもしれないが、他の野生動物を捕食してしまう。日本だけでなく「世界の侵略的外来種ワースト 100」にも選ばれている。

避妊手術でこれ以上増えないようにするべきである。

撮影地：平塚市岡崎



ハクビシン

一 重 (A) 一

中国南部や台湾、東南アジアに分布。額から鼻先にかけて走る白い線が名の由来。毛皮用などとして持ち込まれる。

アライグマ同様、他の動植物への悪影響だけでなく、農業被害も大きい。

採集地：丹沢



撮影協力：県立秦野ビジターセンター

クリハラリス

特 緊 (A) 一

東南アジア原産。飼育されていたものが逃げ出したとされる。湘南地域では、相模川以東に定着し、個体数も多い。

木の皮をかじって木を枯らしてしまう。電線ケーブルを断線させてしまうことも。果樹も好むので農業被害もある。

撮影地：鎌倉市扇ガ谷



スクミリンゴガイ (別名ジャンボタニシ)

— (重) (A) (侵) —

撮影地：平塚市北豊田



南米原産。食用として導入された。卵塊はピンク色で目立つ。稲などを食べてしまい、農業被害も深刻。「世界の侵略的外来種ワースト100」にも選ばれている。

撮影地：平塚市西真土



卵塊

ツルニチニチソウ

— (重) (A) —

撮影地：茅ヶ崎市南湖



写真：岸一弘



写真：photoAC

ヨーロッパ原産。花が綺麗なので園芸目的で持ち込まれたと思われる。繁茂すると下に光が届かなくなってしまう、植生が単調に。地下茎をどんどん伸ばすため、引っ張っても途中で切れてしまい、駆除は困難。抜き続ければ多少抑制されるが、やめたらまたどんどん増えていく。

ウチワゼニクサ

— (重) (B) —

北アメリカ原産。俗にいうウォーターマッシュルーム。丸い葉っぱで、水面を覆ってしまう。湘南地域では、茅ヶ崎市の千ノ川が特に多い。

ビオトープの意味を誤解し、作る際にこれらの外来種を入れてしまう場合がある。

撮影地：茅ヶ崎市十間坂



写真：岸一弘

アレチウリ

特 (緊) (A) (侵)

北アメリカ原産の一年草。輸入された大豆に種子が混入して持ち込まれたと考えられている。ツルが延びて一面を覆ってしまうため（下写真）、在来植物への影響が大きい。

撮影地：平塚市土屋



撮影地：平塚市大島（浜田川土手）



タイワンシジミ

— (総) (A) —

中国南東部～ロシアに分布。在来のマシジミに比べて環境適応力や、繁殖力が高い。在来のマシジミとの交配も問題になっている。

撮影地：平塚市上古沢



セイタカアワダチソウ

— (重) (B) (侵) —

北アメリカ原産の多年草。空地や休耕田、川の土手などで多く見られ、在来のススキなどと競合してしまう。

短く草刈りをして、切ったところから芽が出る。引き抜いても根がちぎれるので、根気よく引き抜きを繰り返すことが必要。

撮影地：平塚市大神



オオキンケイギク

特 (緊) (A) (侵)

撮影地：川崎市（生田緑地）



撮影地：平塚市土屋



北アメリカ原産の多年草。物凄い繁殖力。地下茎を伸ばし、葉っぱも根生葉といい地面近くで広がるため、スコップで掘って取らないといけぬ。

花が綺麗なので植えられてしまいが、植えてはいけない「特定外来生物」である。

オオブタクサ

— (重) (B) (侵) —

北アメリカ原産の一年草。ブタクサとともに花粉症の原因となる。繁殖力が強く、河川敷や空き地などを中心に各地で見られる。

撮影地：平塚市大神



撮影地：平塚市土屋



トキワツユクサ

— (重) (B) —

南アメリカ原産の多年草。観賞植物として導入された。林床など薄暗い環境でも繁茂するので、植物の多様性を著しく低下させてしまう。

撮影地：真鶴町真鶴



ナガエツルノゲイトウ

特 緊 A 一



撮影地：茅ヶ崎下町屋

写真：岸一弘



写真：岸一弘

南アメリカ原産。新しく見られるようになった外来種。水槽の水草として持ち込まれた可能性も。茅ヶ崎市の小出川でも数年前から記録され、すでに広範に分布してしまっている。

侵食性が非常に高く、水草でありながら乾燥にも強い。水面が見えなくなるくらい広がり、他の生物への影響も大きい。

オオフサモ

特 緊 A 侵



撮影地：平塚市土屋

写真：岸一弘



写真：岸一弘

ブラジル原産。アクアリウムなど観賞用に導入されたものが逸脱し各地で増殖した。

特定外来生物であるので、栽培や移動は禁止されている。

ヒメヒオウギズイセン

一 総 B 一



撮影地：真鶴町真鶴



撮影地：平塚市万田（湘南平）

南アフリカ原産の多年草。花が綺麗なため、古くから園芸種として利用されているが、野外に逸脱したものが各地で見られ、増えている。

ヒメリュウキンカ

一 一 B 一



撮影地：茅ヶ崎行谷

写真：岸一弘



写真：photoAC

ヨーロッパ原産。園芸植物として流通しており、光沢のある黄色い花が綺麗なため植えられてしまう。湿地でも乾いた土地でも育ってしまうのが困ったところ。

シチヘンゲ（ランタナ）

一 重 A 一



撮影地：平塚市片岡



撮影地：茅ヶ崎市鶴が台

中南米原産。観賞用として庭に植えられたものが移出して増えてしまった。日本だけでなく「世界の侵略的外来種ワースト100」にも選ばれている。

シンテッポウユリ

一 総 B 一

テッポウユリと台湾原産のタカサゴユリを交配してつくられた園芸種。

種子繁殖力が強く、人家の庭、空き地で急増している。球根の掘り取りなどで抑制しないと、他の草本類の成長を阻害するまでに増える。

撮影地：伊勢原市



写真提供：佐々木あや子氏

ナヨクサフジ

一 一 B 一



写真：photoAC



撮影地：中井町比奈窪

ヨーロッパ～西アジア原産。飼料用として輸入されたものが野外に逸脱し、繁殖している。

湘南地域ではまだ局所的であるが増加傾向にある。

セイヨウタンポポ

一 重 一 侵



撮影地：茅ヶ崎市

写真：岸一弘



写真：photoAC

総苞片（そうほうへん）が反り返っているのがセイヨウタンポポの特徴。

ヨーロッパ原産。在来種と交配してしまっている代表例。特に川の土手のタンポポの多くは雑種化しており、在来のカントウタンポポはほとんど見られなくなっている。

キショウブ

一 重 B 侵



写真：photoAC



撮影地：茅ヶ崎市赤羽根

写真：岸一弘

ヨーロッパ～西アジア原産。花が綺麗なため、各地に植えられている。在来の湿地性植物との競合や在来アヤメとの交雑が問題となる。

カラシナ



撮影地：茅ヶ崎行谷



写真：岸一弘



写真：岸一弘

ヨーロッパ原産の二年草。ある時を境に急激に増え、もう諦めざるを得ないくらい広く分布している。特に川沿いでは大群生が見られる。

ワルナスビ



北アメリカ原産の多年草。牧草に混じって移入された。地下茎により繁殖するため、駆除も困難。鋭いトゲがあるので注意。

撮影地：平塚市土屋



アカボシゴマダラ (名義タイプ亜種)



チョウの愛好家が野外に放してしまったと思われる。エノキを食べる他の昆虫と競合する可能性はあるが、実際の影響はよく分かっていない。

奄美大島とその周辺には奄美亜種が存在し、可能性は低い方が奄美に移入されてしまうと交雑が起こり、在来の奄美亜種は消滅してしまうことになる。

撮影地：平塚市桜が丘



オオカワヂシャ



ヨーロッパ～アジア北部原産の多年草。10年前くらいはほとんどなかったが、現在水辺や湿地で急速に増えている。

※オオカワヂシャの増加で在来のカワヂシャが減少していると考えられていたが、2020年現在、各所でカワヂシャが見られ、相模川ではオオカワヂシャとカワヂシャが混生して群生する状況になっている。台風19号の影響が大きいと思われる。

撮影地：平塚市大神



セイヨウオオマルハナバチ



ヨーロッパ原産。受粉させるための昆虫として今でも温室内だけなら飼育可能とされているが、逃げ出しているものも多い。温室の近辺だけで済んでいるかどうかは、さらに調査をしてみないと分からない。

撮影地：茅ヶ崎市西久保



写真：岸一弘

ヒロヘリアオイラガ



撮影地：茅ヶ崎市芹沢



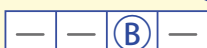
写真：岸一弘

撮影地：平塚市岡崎



インド・中国原産。広食性なのでいろいろな植物を食べる。幼虫には毒棘と毒針毛があり、刺されるとかなり痛む。生垣によく使われるレッドロビンでもよく見られるため注意が必要。

ムネアカハラビロカマキリ



中国原産。平塚市内には広がっていないが、中井町には大分前から定着している。

在来ハラビロカマキリと生息環境が被っており、本種が定着したところでは、ハラビロカマキリがいなくなってしまう現象が見られる場所もある。

撮影地：秦野市曾屋



撮影地：中井町藤沢



写真：岸一弘

クビアカツヤカミキリ

採集地：埼玉県草加市



中国大陸原産。すでに東京に生息しており、神奈川県への侵入が危惧されている。

果樹・街路樹などに幼虫が入ると枯れてしまう。駆除方法がないので、入ったのが分かたら切り倒すしかなく、経済的な損失も大きい。



写真提供：露木繁雄氏

ガビチョウ



中国大陸原産。鳴き声を愉しむためにペットとして飼育されていたものが野生化したと思われる。調査が十分でないこともあり、どのような被害があるのか明確には分らないが、2000年代前半から湘南地域でも急激に増え、今ではどこでも鳴き声を聴くようになった。

撮影地：平塚市吉沢



写真提供：金子典芳氏

外来魚類

ブルーギル
(鰱見川)

写真提供：齋藤和久氏

カワムツ 写真提供：齋藤和久氏
(境川)



湘南地域では、ブルーギル、コクチバス、オオクチバス、カタヤシ、コイ、ヒメダカ、ミナミメダカ、カワムツなど多くの外来魚が定着している。

(魚類は本誌 Vol.16 特集「金目川の生きもの図鑑」に詳しく掲載したので、ご参照願いたい。)